
東方稻子神

アポリオン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東方稻子神

【Zコード】

Z8030Y

【作者名】

アポリオン

【あらすじ】

どうもアポリオンです。メインの「とある死神の娯楽遊戯」が行き詰つたので、気晴らしにちまちま更新していきます。いわゆる東方の短編集です。

やうだ、牛乳を飲もう その一（前書き）

内容には全く関係ありませんが、最近この一人が愛し合つてれば世界が少しあは平和になるんぢやないかって氣さえしています。

そうだ、牛乳を飲もう その1

がりがりがりがりがりがりがりがり

「ムラサ、ストップ」

縁側で足をぶらつかせながら歯むことおおよそ30分。かじついたら肉まで畳みわざだつた。

私はイライラすると爪を噛む癖がある
爪を切る必要がないくらいに
に噛む。

「何年ちゃんと切ってないか分からぬ。おかげで先ほほいもガタガタ。でもそのうち自然と削れて丸っぽくなつてくから困らない。」

だけどイライラしてなくとも無意識に噉む癖がある。だからホントにいつもガタガタ。

「これダメだつて……私が切り揃えたげる」

「いや、別に困つてないからいいわよ」

ぐいと手を掴まれ引き寄せられる。顔近い、顔近い。

「だめ。私が許さない。女の子なんだから指先にも気い使つとこ

「そういうのとか、あんまり興味ないし」

「だあーめ。ムラサがよくても私がいくない! 可愛くしたげるつて」

余計なお世話だ。私は海に生きた女。そして今は聖と仏に仕える身だからそういうのはいらない。

私自身、もとから興味ない。男を誘惑するための飾り付けなんて私はこらないのだ。余分なことはしたくない。

まつすべに、清く正しく、まじめに生きていけばいい。

「何でそんなことするのよ」

「ん？ 好きだから」

いつつもせつだ。私にちよつかいかけてばかり。世話を焼き。おせつかい。

何で？ つて尋ねればいつも決まって「好きだから」。悪戯の免罪符みたいに言わないで欲しい。

仏頂面だつたりニヤケ顔だつたり。そんな軽々しく挨拶みたいに言う言葉じゃないんじゃない？ 知らないけど。

何考えてんだか。まったくもって正体不明。いや意味不明。

私は好きって感情なんて分かんないからいつも困る。困惑して、困惑つて、面倒になつて考えるのをやめる。

ヤツは可愛らしさにピンクの小さな爪切りを持つてきた。ほら、手出してと催促されて反射的に手を差し出す。

エスコートでもするみたいに恭しく握られて手のひらにキスされる。髪の毛が当たつてこそばゆい。

「私のこと、ちゃんと見てくれますよ」

「今こいつやって見てるじゃない…」

「それは違うよムラサあ」

手首のあたりをざりざりと舐めてきたので叩いて躰けた。

まったく舌が動物なら行動まで動物なんだから。だつたら叩いて躰

なこと。

「やつこつ悪戯はいいから。そんなんするなら私、席立つわよ?」「いや、ダメダメ。そんな手してたら自分で引つ搔こちやうでしょ?」「引つ搔かない!」

「腕のとこ、かさぶた作つてるのに? ほら、大人しく切られちゃえばここのはー!」

ぱちん、ぱちん。ヒ白い半円が飛んでいく。噛み切れず残った部分が綺麗に丸く切り取られていく。

あれつてどこに行つちやうんだろうね。田で追つても分かんない。見失う。あ、床に落した。これ踏むと足痛そ。

鼻歌まじりに手際よく切つていくコイツが恨めしい。しかも無駄に上手いから余計腹立つ。

鼻歌に合わせて羽が動くからそれを眺めて田玉をきょろきょろ。ぐるんと一回転。

何でこんなヤツに好きに爪切らしてんだか?。この手をひとつと引っ張つて逃げたらいいじゃない。

いや、違うよ。逃げる必要なんてない、ただ帰るだけでしょ。自分の部屋戻つて後片付けの続きとか。

台所でおゆはんの支度とか、庭先の洗濯物取り込んだりとか。やることはこつくりもあるんだし。私だってヒマじゃないし。離して、離してよ、離せよ、この……

「ぬえーーー!」

「ん?」

「……早くして、じゃないとまた歯んじゃう」

「ん、了解であつます船長ー!」

「うーん、ただけ調子乗らないで欲しい。なーに笑つてんだか。爪の断面をやすりでしゃーしゃー削られる。白い粉がいつぱい飛ぶ。いけないお薬みたい。

指の腹でいつこすつ触つて削れたか確認して。早くしてよ。イラするんだから。

足の指を閉じたり開いたりしたり、擦り合わせたりして居心地の悪さを紛らわす。

上を向いて天井の木目を数えてやります。私は何にイライラしてるんだろう?

だから利にしてるといふが何てか分からぬことに分からなくて
分かんないからイライラしてる。

聖とかの前ならこんなことならぬのに。じゃあハイシのせいね。決めた。私なんかの相手してるヒマ妖怪にイライラしてる。

「ムラサの爪つて綺麗…ほら、まっすぐにピンと伸びて歪みがない。表面も削つたらこんなにピカピカになつたよー」

卷之三

ニキュア塗ろうねー

レナト

そんなの……かじれなくなっちゃう……！

一
ノ
ハ

「イツの真っ黒いマーキュアを塗つた指が私を掴んで離さない。じつたばつたと暴れても余裕の表情でぱっちゃん、ぱっちゃん。妖怪つてこんなに力強いんだ。

にひひと笑う口から覗く歯を何とかへし折つてやりたいと思つて、作戦を練るうと思って、大人しくした方が得だと思って、だから静かにした。

私の爪がなくなつていくんだからコイツの歯もなくなつてもいいはず。また生えてくるんだし、いいでしょ？

表面を目の細かいやすりを使い、至極楽しそうに削つてはいる。粉を払うためにふーーって息を吹いて最後に手で払われた。

表面を触つては満足そうに笑つてゐる。真つ黒いマニキュアと、真つ黒い服、真つ黒い髪。いやだ。

「……黒はいやだからね」

「そんなに私のこと嫌い？」

「……。」

「じゃあ、好き？」

「まさか！」

私に分かるはずがない感情を、よりこよひて「コイツになんて。

「じゃあさ、これ塗りひ。透明でラメ入りで可愛いよ。あんまり派手じゃないしこれならマラサもそんなに抵抗なくできるんじゃないかな」

だつて塗るの初めてでしょ。つてクスクス笑つてゐる。馬鹿にされた。きらきら光る小瓶を揺すつて、羽が楽しげに躍つてゐる。分かった、やっぱり嫌いだ！ だつてだつてこんなにもイライラする。嫌いよー 似合うなんてお世辞言つても騙されないからね。

「黒なんて、嫌いだあ……！」

マーキュアは、つんとアルコールの臭いがする。あんまりお酒好きじゃないからこの臭いも好きじゃない。
いや、あのお酒は好きなんだけどあんまり強くないから、つまりまあお酒は好きじゃない。とも言える。かもしれない。といつ負け惜しみ。

「サクッと塗つてよね。貴重な時間なんだから」

「私たちにとつて時間なんてあるようで無いものでしょ?」

「違うわよ、ちゃんと人としての感覚は忘れちゃダメだつて聖言つてるじゃない。私含めてアンタ以外、みんな規則正しく生活してるわ」

「私は好きなことしかしたくないから、みんなと時間合わせてないんですー。あと夜行性なので」

そんなの言い訳にしていいわけない。

夜行性っていうなら星やナズだって本来そうだろう。一輪だって雲山だつて妖怪なんだからほんとは夜が得意なんだ。

それを何十年、何百年という歳月をかけて修正してきた。口いつにだつてできるはず。

なのに自らの意志で不規則な生活をしてるなら論外。もう勝手にしてくれ。

聖が優しいのは知ってるし良いことだけビ、何でこんなへんちぐりんと一緒に住まわしてるんだろ?つ。

こんなのだったらよくその辺をふらふらじたる傘の方方がいいんじゃないの?

「アンタなんでこの寺いんのよ
「だから、ムラサが好きだから」

「これしか言えないの? 悪戯がバレたときの言い訳つてたくさん考

えないのかしい。

ぐるんぐるん脳みそが混乱してる。コイツと喋ると疲れる。そういう間にもせつせかマーキュアが塗られていく。

私の爪が今までにないくらいに、キラキラって輝いていた。あかぎれ、まめ、切り傷、擦り傷なんかが常だつた手に似つかわしくない爪。

さっきまで噛んでたなんて信じられないくらいにキラキラでピカピカだった。

……なんだかちょっとぴり、こいつの悪くないかもね。

「さあれもいっぱいだね……これ自分で剥いでるでしょ？」

「だって噛むと皮膚はがれるし。それ邪魔だし。イライラするし」

「もつと自分大切にしなよ」

「どうせ死なないからいいのよ」

もう死んでるし。幽霊だし。なのに妖怪だし。というか爪とかさされくらいで如何にもなんないし。

腕ぶつちぎれても時間経つたら治るんだから。私たちはそういう存在でしょう？

「私が嫌だから。やめて」

「なにそれ……勝手すぎる」

「はいはーい、何とでも言つて下さいな。塗れたから10分くらい動かさないでね」

ぼふつと私の胸に飛び込んで言った。

最後の方はもじもじ言つてあんまり聞き取れなかつた。え？ なにしてるの？

「柔らかい。あつたかい。ぱふぱふ、ぱふぱふ」

「ねえ……今度、風呂入るときは気をつけなさい。知ってるかしら。

生物はたった洗面器一杯の水だけでも溺れることができるのよ？」

「それは怖いね」

そのあとも爪が乾くまでの約10分。コイツは私にしがみついていた。だから最後に一発叩いておいた。

躊躇ちやんとしないと。というか、ほんとに沈めてやらうかじら。

そのあと台所におゆはんを作りに行つた。

先に一輪がいたから申し訳ないなって思いながら手伝つたけど、何だかいつもと違つてやりにくかった。

変わつていないといえば変わつてないけど、気になつて仕方ない。手をわきわきと動かして、意味もないのに陽に透かしてみた。ガタガタの部分はきれいさっぱり無くなつていて、かわりにピカピカの指先があつた。

爪が短くなつて困ることがある。袋を開けるのがやりにくい。気になつてしまふがない。

なによりも齧られない。一度齧つてみたが妙に苦くてやめてしまった。でも。写経をするとき、筆を握つても痛くない。皮膚をぽりぽり搔いても血が出ない。頭洗うのが下手な私は爪を地肌に立てて洗うが今日は？

「痛くない……」

イライラしたから、これからアライツのおゆはんには嫌いな野菜をたっぷり入れてやることにする。やまみ。

やつだ、牛乳を飲もう その一（後書き）

最初はメインでも活躍中のぬえとそのカップリング相手のムラサのおはなし。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8030y/>

東方稻子神

2011年11月23日21時52分発行